2023 年度 4 月入学　修士課程一般入学試験・国費留学生等入学試験・学内選抜入学試験（第 2 回）
2023 年度 9 月入学　修士課程学内選抜入学試験（第 1 回）・海外指定大学特別選考
事前課題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みます。

設問

課題文には「ことばのオモテは 1 つであるとは限らない」とあります。これはどのような意味か、簡潔にまとめなさい。そのうえで,「ことばのオモテは 1 つであるとは限らない」ことの具体例を自身の経験に基づいて述べなさい。

課題文

伝えたいことがあるのに、それをどうことばに表してよいのかわからないことがある。ことばにしたけれどもちょっと違うなと思うこともある。ちゃんと伝えたつもりだったのに、誤解されてしまった経験もある。何も言わなかったことで、メッセージを伝えてしまうこともある。ことばというものはコミュニケーションに欠かせないものであると同時に、扱いを誤ると思いがけない結果を生むことがある代物だ。便利な道具であると同時に、トラブルの原因にもなりうる。

コミュニケーションにおいて、ことばが道具になったりトラブルの原因になったりするのはなぜだろうか。ことばを使ってコミュニケーションをするときの根本的な問題は心とことばの関係だ。話し手が伝えたいと思っていることは心の産物である。私たちは心の中で新しいことをいくらでも考えたり感じたりすることができる。何をどのように考えるか、感じるかの可能性は無限である。一方、私たちが使える語彙は有限である。新しい語彙はそう簡単に増えたりしない。考えうることが無限であるのに、それを伝える道具としての語彙が有限であれば、思ったことや感じたことを表すのにぴったりしたことばが見つからないというのは不思議なことではない。比喩を使って表現したり、少し長い文で説明する必要がある場合も出てくる。コミュニケーションにおいて、話し手が伝えたいことは話し手の心の中にあって、聞き手からは見えない。それを伝える道具としてことばがあるのだが、伝えたいことをすべて伝えきるほど、ことばは完璧な道具ではないというのが根本的な問題である。

必然的に話し手が伝えたいことと、使われたことばの意味との間に何らかのギャップが生じる。程度の差はあれ、このようなギャップはコミュニケーションにはつきものである。聞き手がうまくそのギャップを埋めることができればコミュニケーションは成功するが、いつもうまくいく保証はもちろんない。それに加えて、話し手自身の能力の問題もある。ことばを操るのが得意な人もいれば、そうでない人もいる。潜在的な能力はあっても、疲れていたり、注意が散漫になっていたりすると、思ったことをうまく言い表せない場合もある。

話し手の立場から見ると、コミュニケーションにおいて誤解が生じる場合には、少なくとも3つの異なった状況が関与していると考えられる。1つは、話し手自身が自分の思っていることをうまく把握できなかった場合だ。つまり、自分の心を読み誤ったときである。2つめは、話し手自身は自分の思いをきちんと把握できたものの、それを的確にことばにできなかったときだ。心とことばをうまく結びつけることができなかったということだ。最後は、話し手はきちんとことばを選んで表現したはずなのに、それがうまく相手に伝わらなかったとき。何らかの理由で、ことばの意味と伝えたかったことの間のギャップを、相手が埋められなかったことが原因だ。

一方、聞き手の立場から見ると、この最後のパターンのみが誤解の原因となる。聞き手には、話し手の心の中は見えない。だから、聞き手にとってのコミュニケーションのプロセスは、話し手が何かを伝えようとしていることが具体的に確認できたところから始まる。たとえば話し手がこちらを見てことばを発したときだ。聞き手は話し手が発したことばを手がかりに、話し手が伝えたかったことを見つけなければならないが、そのギャップをうまく埋められない場合が少なく

とも2通りある。

1つは使われたことばの意味は理解したけれども、行間はうまく読めなかった、あるいは誤解してしまったという場合だ。この章では、話し手がことばを通して伝えようとしている意味を、ことばにしないで伝えようとした意味、つまり行間の意味と区別しよう。そしてことばを通して伝えようとした意味を「ことばのオモテ」、ことばにしないで伝えようとした意味を「ことばのウラ」とよぶことにする。ことばのオモテは理解できたけれども、そのウラにあるメッセージを読み誤ってしまったということはよく起こる。

もう1つは、聞き手がそもそも使われたことばの意味を取り違えてしまったという場合である。話し手がことばを通して伝えようとした意味、つまりことばのオモテは1つであるとは限らないからだ。<中略> まずはことばのオモテを理解することということが、じつは決して簡単なことではないというところから話を始めようと思う。

<中略>

「見て、大きなくも」
「お正月はたこがいい」
「かみを切ってみよう」
「ふけいが見回りをしている」

これらの会話のことばの中で、ひらがなで書かれている名詞にどんな漢字を当てればよいだろうか。すぐに気づいた方も多いと思うが、それぞれ少なくとも2つの漢字があてはまる。

「見て、大きな蜘蛛・雲」
「お正月は蛸・凧がいい」
「髪・紙を切ってみよう」
「父兄・婦警が見回りをしている」

漢字で書いてあれば問題なく意味がわかるが、もし会話の中で使われたとすると、2つの漢字のうちどちらか1つをあてはめて解釈する必要がある。いったいどのようにして私たちは、普段そのような選択をしているのだろうか。

「かみを切ってみよう」を例にとって考えてみよう。このことばの前に、次のような一言があったとしよう。「もし気分が落ち込んでいて、なかなか新たな一歩を踏み出すきっかけが見つからないなら（かみを切ってみよう）」。この場合、「髪を切ってみよう」という解釈がすぐに思い浮かぶのではないだろうか。あるいは次の一言があったらどうだろう。「まず1枚を半分に折って、真ん中に折り目をつけたら開いてください。その折り目の線にそって（かみを切ってみよう）」。この場合は、「紙を切ってみよう」がまず思い浮かぶと思う。

このように、同音異義語が使われていたとしても、前に出てくる文章や会話のことばの影響で、自然に1つの意味解釈だけが思い浮かぶということが多い。そしてそのような場合、たとえば「かみを切ってみよう」ということばに複数の解釈があるということにも思い及ばないことがほとんどだろう。先行している会話のことばが手がかりとなって、複数の解釈候補の中から1つが選ばれたのだろうが、その選択はじつは本人の意識が及ばないところでなされているようだ。

この例のように、ことばの複数の解釈候補の中から、話し手が意図した意味を選択するための手がかりとなる情報を文脈とよんでいる。先行する会話は主要な文脈だが、もちろんそれだけではない。どういうことを言いそうな人かといった会話の参加者に関する背景知識や、その他の一般知識、社会規範、文化的価値観なども文脈として用いられる。

解釈に必要な文脈はたいてい話し手の側から明示されることはなく、聞き手が発話解釈の過程で自ら推論を用いて見つけ出すことが期待される。先の「かみを切ってみよう」の例の場合は、文脈を手がかりに意味をつかむことは非常に簡単だったと言えるが、いつも同じように簡単というわけではない。「あの人が言いたかったことがわからない」と感じるときや、「もっとはっきり言ってくれればよかったのに」と思うようなときには、文脈がうまく見つからなかったことが原因である可能性が高い。

松井智子（二〇一三）『子どものうそ、大人の皮肉』岩波書店、pp.102-107